

佐々木陽一郎教授最終講義***経済史における一次史料**

——貧乏人の子沢山とは真説か？

私は経済史、中でもとくに人口史を専攻しているものですから、どうしても第一次史料というものを扱わなければならないわけです。その第一次史料を使って何ができるか、あるいは何が分からないかということについて、私の研究の一端をご紹介しますと思います。

まず最初に第一次史料について申し上げます。これはあまり聞きなれない言葉でありますけれども、第一次史料とは、過去、現在に起こした事件を直接体験したか、あるいは伝聞したか、目撃した人々によって記録された文書、原則として文書を第一次史料と言います。で私の場合には歴史家なものですから、扱うのは過去です。しかしながら現在の事件も一度起こればそれはすぐに過去となり、起こった事件とみなすことができます。時間は刻一刻と過ぎ去り、現在もすぐ過去になり、歴史になるからです。

それでは、なぜ第一次史料がそんなに貴重なのかといえば、体験した人あるいは目撃した人、伝聞した人々が起こった事件について、時間的に同時に、あるいはそれに近い時間帯に経験したことを記すのですから、それは一応正確であり、また詳細に記されているからです。たとえばユ

注*： 本稿は1998年1月23日に行われた佐々木陽一郎教授の最終講義の録音テープにもとづいて、秋元英一が編集したものである。

リウス・カエサルというローマの有名な将軍がおりますけれども、このユリウス・カエサルが書きました『ガリア戦記』などは、自分が直接体験したことを綴った貴重な史料の代表だと考えてよろしいかと思えます。もちろん何も起こらなかった、ということ、今日一日何も起こらなかったというのは、その意味においては一つの事件だというふうに、みなせるわけです。事件というとは何か変化を予想させますけれども、朝が明け、昼がやってき、夕方には夜がやってきて、その日は何も起こらなかった、普段の一日であり、あるいは一定の日数でも、例えばそれは平穏な時間帯ということで、それなりに意味を持つはずです。その意味におきまして、日記というのは第一次史料として、非常に価値の高いものだと思います。その日その日に起こったこと、あるいは起こらなかったことを記録するので、非常に貴重な史料とすることができます。

しかしわれわれが手にすることができる日記には、実は二通りの日記があります。ひとつは毎日の出来事を備忘録のつもりで書いているものがあります。もうひとつは生前、あるいは自分が死んだ後、出版されることを期待して書かれる日記があります。昨年完結しました『高松宮日記』などは前者に属すると思えますし、後者の代表的なものとしては、永井荷風の『断腸亭日乗』を挙げることができるかと思えます。前者は主観的に書かれたものであっても、その日その日の出来事をかなり客観的に綴ってあります。そういう意味で史料価値は非常に高いと言えるわけです。しかしながら、後者、つまり永井荷風の『断腸亭日乗』などは、他人に読まれることを前提としているのですから、そこには何らかの脚色があり、書かれていることを吟味しながら読む必要があります。

しかしながら日記は第一次史料の代表的なものとは言えません。われわれが使う第一次史料というのは、公文書あるいは私文書のような記録であります。私が専攻する江戸時代について言えば、たとえば『御触書集成』、あるいは『徳川禁令法』のような徳川幕府の法令集があります。

あるいは商人の大福帳、金銭出入帳のような経済史料、あるいは農民の小作料徴収簿のような経済史料も存在するわけです。あるいは江戸時代において村方三史料と言われた、年貢割付帳、年貢皆済帳、宗門人別帳などが代表的なものです。こういったものは直接体験した人が、その場で記録する、しかも年貢割付帳、年貢皆済帳などは、これは公的な性格を持った史料です。もちろん第一次史料というのは、文書に限らないことは言うまでもありません。絵画、彫刻、そして何よりも考古学の出土品などは、きわめて貴重な史料であります。しかしながら文書が史料として高く評価されるのは、文書の持つ情報量が、圧倒的に多いからです。たとえば、ある時代に描かれた風俗画などは、当時の人々の衣服、調度品、家具、家屋の構造などの様子を伝えてくれますけれども、時代を特徴づける、人々の価値観、行動様式、あるいは社会構造などは、これは史料から読み取ることは、不可能とは言えないまでもかなり困難です。今日のような高度情報化社会におきましても、数字を含めた文字の持つ情報量は、断然他の媒体を圧倒していると言えます。

ところで、第一次史料があるのなら第二次史料とはどのようなものか、ということですが、第一次史料を引用したり、あるいは加工したりしたものを、第二次史料と、私は呼ぶことにしております。他人が書いたものを引用したりあるいは加工したりするわけですから、正確に引用されるとか、あるいは加工が十分であるという保証はないわけです。いわゆる孫引きが厳禁されるのは、そのためです。このように第二次史料には、それを使うについては、かなり問題がある、もしかすると事件の真相を第二次史料は歪めて残すかもしれない危険性があるわけです。

それでは、第二次史料にそのような欠陥があるのであれば、第一次史料はそのまま利用してよいのかというと、実はそうも行かないのです。たとえば、文書がどのような意図で作成されたのか、つまり『古事記』や『日本書紀』のような最初から歴史として書かれたもの、あるいは『枕

草子』のような随筆では、自ずと書く目的、書かれた内容、出来事を描写する切り口などには、大きな差異があるからです。そこで当然のことながら史料批判をしなければならないわけです。文書作成者が置かれた環境、立場、めざしている目標、事態を客観的に描こうとしているのか、あるいは自分の主観的立場によって書いているかによって、同じできごとでもその内容は大きく異なります。したがって、われわれは第一次史料といえども、それを無媒介に使用することはできないので、必ず史料批判をしなければならないのです。

注意しなくてはいけないのは、大量印刷技術が発明される以前の文字は、そのほとんどが手書きだということです。とくに私が専攻しております江戸時代について言えば、お家流という流派に属する崩した文字が、公用語になっているわけです。わずか二、三百年の時間しか経っておりませんけれども、二、三百年前の手書きで書かれた文書を読むことは、特別訓練を受けなければほとんど不可能です。相当程度の訓練を積まないと、お家流で書かれた文書を読むことはできません。したがって、誤読、書かれてある史料を誤って読むということ、これは厳に戒めなければならないことです。それと同時に、第一次史料であっても、誤記、誤って記された可能性があるということについても常に念頭において史料を見なければならないと思うわけです。たとえば、日本最初の歴史であった『古事記』、あるいは『日本書紀』にしましても、原史料はとくに失われております。現存するのは、後世の筆写本ですから、その時に写し間違いがあった可能性がありますし、写し違いが絶対にはないとは言えないわけです。

時代が急に新しくなって恐縮ですけれども、江戸時代の中期、貞享5年、これは実は元禄元年でもあるわけですが、西暦年号に直しますと1688年であります。この年に井原西鶴という、その当時大阪の文豪と言っていいでしょう、この井原西鶴が出版した『日本永代蔵』という

本があります。この本はもちろん井原西鶴が墨と筆と紙とをもって書いたものです。ところがわずか三百年前のオリジナル史料であるにもかかわらず、これが1956年に岩波書店で出版されたときには、実に三通りの『日本永代蔵』を集めてきて、そこで校定をし、正確を期するという仕事をしなければならないのです。したがって、第一次史料であるからと言って、われわれが直接それに飛び込むのは、大きな過ちを冒す危険があるのでして、必ず史料批判というものをしなければなりません。

ここでちょっと話題を変えさせて頂きたいと思います。ドイツにビッテンベルグという町があります。雨宮さんだったら御存知かもしれませんが、1517年10月31日に、マルチン・ルターが、このビッテンベルグの町の教会のドアに95ヶ条の公開質問状を掲げました。当時、腐敗しきっていたローマ法王に代表されるカトリック教会に対して、痛烈な批判を行ったわけです。いわゆる宗教改革の始まりです。中世カトリック教会の基礎を揺るがすことになったこの宗教改革は、その当時ルネッサンス文化が最も華やかであったイタリアのフィレンツェやベネツィアではなくて、経済的にも文化的にも遅れていたドイツの片田舎で発生したところに一つの意味があるかと思えます。

これをもってプロテスタンティズムは一応成立したわけですがけれども、しかしながらルターの宗教改革というのは、中世ドイツという風土性とそれから領主の思惑によって、その広がりには一定の限界がありました。領主の思惑とは何かといいますと、カトリックからプロテスタントに鞍替えすることによって、その当時タイスと呼ばれた十分の一税を、自分の領土からローマ法王に送ることをしなくても済むようになったので、つまり領主の収入がそれだけ増えるわけですね。そういうこともありまして、このマルチン・ルターにとって起こされた宗教改革は、まだ国とは言えない、つまり国とは言えないということは、逆に言えば、非常に国際性に富んでいたスイスで、カルヴァンニズムとして確立し、これに

よってプロテスタンティズムが西ヨーロッパ全体に広がっていったといえます。このようなプロテスタンティズムの確立というものに対して、在来のカトリシズムは非常に大きな危機感を覚えたのです。自分たちが今まで安穩とあぐらをかいてきたカトリシズムの地位、いわば地盤が崩され始めたわけです。そしてカトリシズムのほうでも、自己改革を始めるようになりました。その始まりは非常に早く、16世紀にはさまざまな自己改革が行われたわけです。たとえば、イグナティウス・ロヨラが設立し、1540年にローマ法王によって正式な勅許を得た、イエズス会という会がありますが、これもその一つです。このようにプロテスタンティズムとカトリシズムの激しい宗教上の対立は、やがて実際の戦争にまで発展していくわけです。たとえば、フランスにカトリーヌ・ド・メディチスという摂政がおりました。これはあの有名なフィレンツェのメディチ家からお嫁にきた女性ですけれども、このカトリーヌ・ド・メディチスが摂政だった頃、プロテスタンティズムとカトリシズムの対決は遂に血を見ることになり、20年間で約40万の死者が出たとされているわけです。

話しはまたちょっと変わりました恐縮ですけれども、一方、1492年、この年はコロンブスがアメリカ大陸を〈発見〉した年です。また1498年にはバスゴ・ダ・ガマによるインド航路の開拓が行われました。これによって16世紀は、西ヨーロッパがいわゆる大航海時代に突入した時代となります。この大航海時代は、新大陸、つまり今まで知られていなかった南北両アメリカ大陸を発見する、あるいはそれまでアラビア商人ががんばっていたために、直接旧大陸であるところのインド、あるいは中国に接触できなかったヨーロッパ人が、この大航海時代の開始とともにそれらの土地に接触するようになったわけです。考えてみれば、1945年に至るまで世界をリードしていたのは欧米諸国ですね。つまりヨーロッパの世界侵略という言葉は不適當かもしれませんが、世界的な拡張

というのは大航海時代に始まるという具合に考えられます。

他方なおヨーロッパでは、プロテスタントとカトリックの激しい対立が続いております。この対立に嫌気がさしまして、イエズス会を初めとするところのカトリック系の修道会は、もはやヨーロッパに自分達の教義を押しつけることをやめて、まだキリスト教の知られていない地域にそれを知らしめようとしたわけです。また大航海時代の始まりとともに、ヨーロッパ人は経済力と武力とをもって、非ヨーロッパ圏を次々と植民地化していくわけです。イエズス会というのは、結局そういったヨーロッパ勢力の海外発展の尖兵として、アメリカやアジアに渡ったわけです。そこで彼らのイエズス会の教義というものを伝えることにしたわけです。

さてこのような国際情勢の中で、1506年にスペインで生まれたフランシスコ・ザビエルという人がいることは、皆さんご存知かと思えます。彼は、パリ留学中にロヨラと会いまして、心機一転ロヨラの門に入りまして、イエズス会成立に大きな貢献をした人物です。その後、ポルトガルのジョアン三世という王様がアジアに雄飛しようと、つまりアジアをポルトガルの圏内に入れようという努力を始めます。その時に、このジョアン三世は、ザビエルに出会いまして、インドの法王代理として、この方面にカトリックを広めてくれというふうに頼んだわけです。ポルトガルは、もともとこれはカトリックの国ですから、そこに何の問題もないわけですね。ザビエルはインドの法王代理といたしまして、1542年にゴアに到着いたします。それからインドの東海岸、西海岸地域、あるいはセイロン島、今日のスリランカですね、マラッカ、モルッカ諸島で超人的な伝道活動に入るわけです。そこで一応の成果を見たわけですが、たまたま1549年にモルッカで日本人のアンジローという名前の人とめぐり会って、このザビエルの布教意欲は一層かきたてられ、やがて1549年に直接日本を訪れて、日本での布教活動を始めました。しかしザビエル

の布教活動は、その当時の日本の国情、つまり応仁の乱から始まる戦国時代に突入し、中央政府の権限が、あるいは権力が極度に衰退していた時代ですから、京都に行ってカトリックを布教しようと思っても、たいした効果は上がらなかったわけです。ザビエルは、日本に2年と3ヶ月住みついて、布教活動を行ったわけですが、その間に獲得した信者は千人ないし千五百人に過ぎなかったといわれております。

しかし16世紀後半になると、信長、秀吉が戦国時代にピリオドを打つべく、日本統一をめざし、徐々に中央集権政府が確立しはじめます。そういう日本における新しい国造りが始まった時と機を一にして、ポルトガル、スペインの伝道者が、この戦国大名、あるいは信長、秀吉の保護の下で活発な布教を始めたわけです。この信長と秀吉が、キリスト教を優遇した背景には、次のような事情があったのです。

この二人がめざしたものは、武士階級を頂点とする、単一社会を作り上げ、古い中世制度を廃止することでした。そういう目的をもって、信長も秀吉も活躍したわけですが、しかしこの同じ16世紀の日本には、こういった武士団を中心とする新しい国造りをめざす集団とは、相容れない別個の原理をもつ、社会構成をめざす集団がありました。それはその当時、多くの信者を獲得していた浄土真宗の一向一揆です。この一向一揆は、武士の一元社会化とは相容れない宗教集団の国を建設しようとしたわけです。とくに加賀、能登、これは現在の石川県ですね、それから越後、新潟県、は武士の勢力を駆逐して、一向一揆が支配した国と言われました。それから最後には江戸幕府を作りました徳川家康も、若いときにはかなりこの一向一揆に苦しめられております。先祖代々の重臣達が次々と家康のもとを去って、一向一揆に走っていく、そして家康に刀を差し向けてくるという苦しい時期が家康にもあったようです。また信長も、大阪の石山、これは現在の大阪市ですが、大阪石山の一向一揆を三年の長きにわたって包囲しつづけたにもかかわらず、ついに

勝利を収めることはできず、時の天皇、正親町天皇に依頼して、和睦するに至ったわけです。しかしながら信長、秀吉の軍事力は益々充実していくようになります。彼らは、蓄えていった強大な軍力、武力を背景といたしまして、一向一揆の弾圧を徹底的に行うようになりました。たとえば、その一例として、1570年に信長は、伊勢の長島の一向一揆を攻めまして、これを完全に包囲し、四方八方から火を放って、その中に入っていた一向一揆の人たちを焼き殺したわけです。その時の焼き殺された人数は約2万人とされています。したがって信長と秀吉が、キリスト教を一時的にせよ優遇したのは、この一向一揆勢力を削ぐ狙いがあったといわれています。

しかしながらキリスト教もやはり宗教ですね、信長、秀吉がめざした軍事力に基礎を置いた純粹封建制と、キリスト教とは所詮相容れないものであり、やがて秀吉は漸次キリシタンの弾圧を行うようになります。信長、秀吉の後をついで将軍になりました家康も、同じくキリスト教を弾圧し、たとえばキリシタン大名であった高山右近以下、多くのキリスト教徒を国外に追放するとか、あるいは弾圧があまりにも耐え難く厳しいために、公然としたキリスト教活動を行うことができずに、いわゆる隠れキリシタンにならざるを得ない者もあったわけです。その後も国内の隠れキリシタンに対する追及は激しく、実に多くの殉教者を出しております。最後に1637年に島原の乱がおこりまして、これでキリシタンの本格的弾圧は、一応の結論をみたのです。

これまではちょっと脱線して横道になりましたけれども、このキリシタン弾圧がなぜ宗門人別帳に結びつくのか、というところに入りたいと思います。つまり、信長、秀吉、そして江戸幕府の家康と三代にわたって、徹底的に日本の仏教に弾圧を加え、彼らを単なる葬儀屋にしてしまったわけです。したがってもはや彼らにとっては、日本の在来的な仏教は恐れるにたらず、ただキリシタンあるいはキリスト教という新

しい宗教が、日本人を捉え、そのことが徳川幕府がめざす、あるいは秀吉がめざした、武士を中心とする一元社会の構成に、著しく阻害要因になるという具合に考えます。恒久的なキリシタン禁制のために、江戸幕府は、17世紀の中頃、「宗門改め」という制度をとるようになりました。宗門改めの最も古い原形は、長崎板に彫ったキリストの似顔絵を踏ませ、踏ませることによって、キリシタンであるかどうかを判断したわけです。

家康のとったキリシタン禁制のための措置というのは、踏み絵なんていう生易しいものではなくて、徹底したものであったわけです。つまりその当時の地方自治体であった村、あるいは町ごとに、世帯単位で一人一人について戸主との続柄、及び自分が仏教の檀家であると、仏教寺院の檀家であるということを、寺に証明させる制度です。この点で注意していただきたいことは、寺は、この人物は自分の寺の信徒であるということ、証明する必要があるということです。村は、この「宗門改帳」というものを正副二通の帳面にして、正本は領主に提出することが義務づけられ、副本は村で保管されるのです。われわれが今日利用できる「宗門人別帳」というのは、この村で保管されている副本であることが多いわけです。正本のほうは、明治維新の時に、多くの藩で焼き捨ててしまったと思われまして、現在はほとんど残っておりません。しかしながら正本と副本とは、内容はまったく同じですから、副本を使ってわれわれが何か作業するについては、全然差し支えないわけです。

さて、戦国時代の末期ともなりますと、信長、あるいは秀吉、家康の軍事行動の後を辿っていきますと、しだいしだいに戦争の規模が大きくなり、しかもその戦争が長期にわたる、というふうには日本の戦争形式が大きな転換を遂げます。そのためには、戦争のない時には、田圃で稲を耕し、いざ戦争がある時には、槍や刀をもって飛び出すという、いわゆる半農半軍人的な戦闘員では困るわけです。長期の、長距離の遠征に耐え得るような職業的軍人が必要になってまいります。したがって今まで

の武士，半武士半農家であったものを，どっちかにする兵農分離を行うわけです。ところが，いうまでもないことですけれども，長期にわたる遠距離の戦争においては，当然のことながらロジスティック，補給が必要になってまいります。あるいは非戦闘員であっても戦場において要塞を作るといような作業があります。そういった今日の言葉で言えば，後方支援を担当してくれる人たちを探さなければならないし，その人たちは，当然のことながら兵農分離された農民に，そういうマンパワーが求められたわけですね。したがってその後方支援の要因として動員しうる農民を，世帯ごとに人数，性別，年齢，それから後方支援ですから体が丈夫でなければいけない，したがって身体の状態，たとえば，差別用語になるかもしれませんが，盲（めくら）とか，ちんばだとかいうふうな記事が出てきます。何の誰，これはちんば，何の誰次郎，これはいざりという具合に，一人一人の人間の身体的特徴を捉えていくわけです。これが「人別改め」と呼ばれているもの，これを帳簿に使うのが「人別改め帳」です。この人別改め帳は，戦国時代の末期から，江戸時代の初期にかけて書かれたものが，かなり現在でも報告されて残っておりますから，機会があったら読んで頂きたいと思うわけです。つまり人別改めというのは，今日の国勢調査に当たるものであった，という具合に考えることができると思います。

江戸時代の，先ほどお話しました宗門改めと人別改めですが，両者はその目的が全く違うわけです。宗門改めのほうは，キリシタンバテレンの禁制であるし，人別改めのほうは，これは後方支援の動員可能数を調査しているわけですが，しかしながら書き方としては，世帯主，それから世帯主に続く続柄をずっと列挙して行って，人別改めの場合だったならば，そこに身体的特徴を加えるし，宗門改めの場合には，その人間の宗門を，信じている仏教をお寺に証明させるわけです。ですから両者は大変に似通ったものなのです。とくに，島原の乱以降，大規模な戦争が

行われなくなると、しだいしだいに将軍や大名の人別改めの要素というのは希薄になっていって、より宗門改めの要素が濃くなっていったわけです。しかしながら宗門のためには、この人間がキリスト教徒でない、ということを証明すればそれでいいわけですから、たとえば年齢なんていうのは、書かなくてもいいし、あるいは戸主との続柄なんかも書かなくてもいいわけですが、今日われわれがよく目にする宗門人別帳は、戸主との続柄、年齢の記載、等々が記入されておりますから、人別改めの名残りもまだ残っているという具合に言えるはずです。

さてこの宗門人別帳は、地域、時代によって、記載内容にかなり相違があります。最低限押さえるのは、性別、戸主との続柄、年齢、旦那寺の証明、これが宗門人別帳の最少要件です。さらに詳細な宗門人別帳になりますと、たとえば、町人や農民の出自、あるいは前年に比べて変化が起これば、その変化が起こった理由、等々を記入するようになります。したがって世帯単位でもって戸主を当主とし、それに続く妻や子供たちを書き上げていく、しかもそれには年齢が書いてあるわけですから、これは第一級の人口の静態史料というふうに見ることができるはずです。したがってかなり詳しく書かれている宗門人別帳、つまり宗門人別帳本来の目的である、キリシタンバテレンの禁制だけではなくて、それ以外に様々な情報を持っているより詳細な人別帳、時には、その人別帳一つだけでもって、人口静態の優れた史料という具合に見ることができます。しかも現在の国勢調査が、5年に一度しか行われたいのに対して、この宗門人別帳は、必ず毎年作られます。

したがって一定期間の宗門人別帳を縦に並べることによって、人口の動態を知ることにもできるわけです。たとえば、1773年に何の誰平という人がいると、それが1774年には宗門人別帳から姿を消して、というふうな書き方の宗門人別帳もあれば、より詳細な宗門人別帳があると、その人間が、その人物がどうして宗門人別帳に載らなくなったのか、と

いう理由まで書いてあります。もっと詳しいわけです。その他に引越し等々の情報が入っているわけです。人別帳は毎年作成されるのですから、一定期間の宗門人別帳を継続して観察すれば、人口動態統計として利用できます。この時に前年に比べて移動があった場合、変化があった場合に、その変化の理由、出生、死亡、婚姻、離婚などが記録されています。

そしてこの宗門人別帳は、毎年その時その時の名主、名主というのは関東地方の呼び方でありまして、関西地方では庄屋になりますけれども、名主もしくは庄屋が、村あるいは町の人口について、以上の項目を調査し記録して冊子にまとめるわけですから、これはまさに第一次史料と読んで差し支えがないと思います。そしてこの宗門人別帳に書かれてある内容から、今日の人口学が網羅しているさまざまな出来事と申しますか、さまざまな調査項目を宗門人別帳から抽出することができるわけです。ただし今日の人口学で扱う諸項目、たとえば人口推移、人口が減ったか増えたか、出生率はどうか、あるいは死亡率はどうか、出生率と死亡率がわかれば自然増加率がわかります。あるいは最近日本で騒がれている、その下落ぶりが騒がれている特殊合計出生率、あるいは年齢別の死亡人口を出すことによって、生命表をこれから作ることができるし、生命表ができれば平均余命を計算することもできます。

つまり宗門人別帳が毎年毎年作られた国勢調査である、これはもちろん家康なりその息子達が意図した目的とはまったく違う使い方を、われわれはしているわけです。徳川時代に作られた宗門人別帳というのが、結局キリシタンバテレンを禁止するためのものであったわけですが、それが図らずも戸籍となってわれわれの手に残っている。その戸籍を縦につなげることによって、動態統計も計算することができるということです。したがって以上をまとめますとルネッサンス時代のローマ法王を頂点とするカトリシズムの腐敗というものが、ルターの宗教改革を産み、

それに対抗するものとして反宗教改革のイエズス会が創設され、さらにそのことがザビエルをして日本に上陸せしめ、それがキリスト教の禁令という江戸幕府の措置によって宗門人別帳という、前近代社会としてはきわめて高度な人口史料を作らせたということが出来ます。このように見ますと歴史というのは、どうも偶然がつながって現在の事態があるというふうに考えることもできるかと思います。

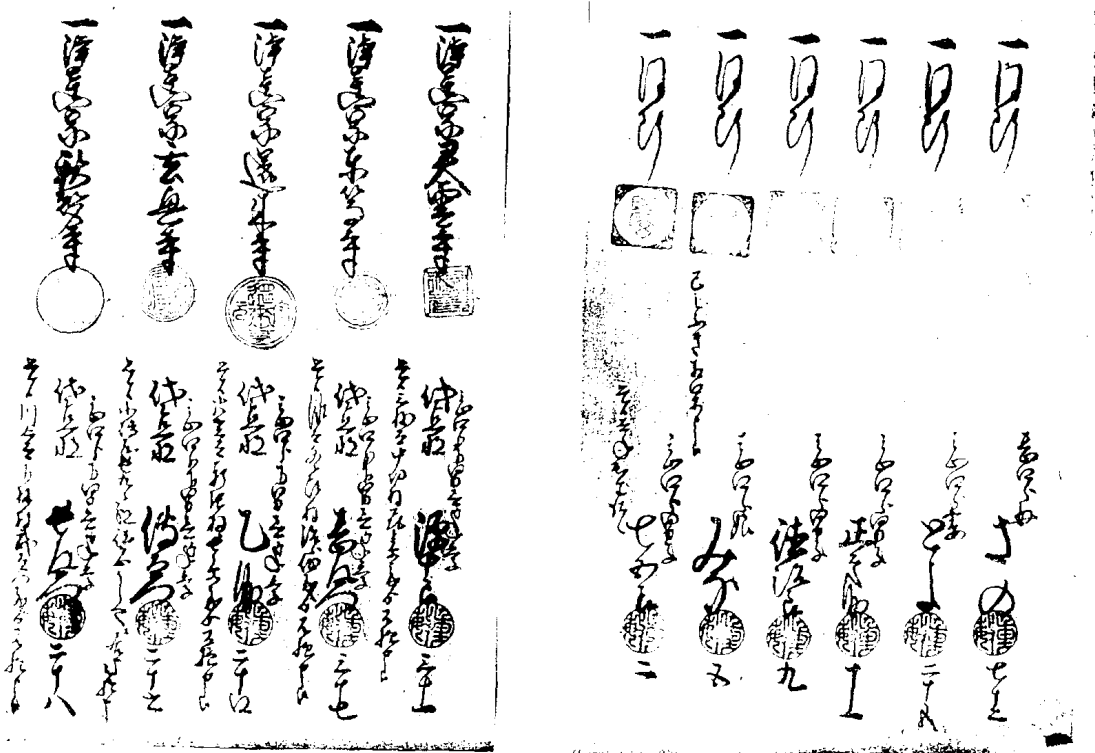
それで、これから宗門人別帳の史料のコピーを見ながらお話をしたいと思います。これは宗門人別帳の表紙です（図1参照）。場所は飛騨の高山。飛騨の高山式之町でありまして、午年宗門人別御改帳です。安永三年午三月、午というのは十二支の子、丑、寅、の午ですね。午年宗門人別御改帳とあります。これは与頭（くみがしら）です。与頭というのは、この飛騨高山の町が、さらに与に細分されています。その与の長が与頭です。この字を頭と読むのは大変な作業ですけれども。で米屋がついている。米屋治兵衛という人がこの与の与頭です。

こっちのほうは、前がちょんぎれていて、ここから始まります（図2参照）。高、二六六石七升三合八夕と書いてあります。これは何かといいますと、水田や畑の生産力を米に換算したものです。したがってこの二六六石七升三合八夕というだけの生産力を、米に換算した生産力を持っているということが、ここに書かれていることです。その家は、家持ちの甚四郎という人、年が三四歳です。これは、家持ち、そして甚四郎、これがはんこを押してあります。このはんこは甚四郎のはんこです。これが、真蓮寺、浄土真宗真蓮寺というお寺の証明印です。以下を読んでもみますと、甚四郎、さっきの戸主です。甚四郎の母、さの、歳は七二、それから甚四郎の妻、とよ、歳が二五、それから甚四郎の男子、正之助、歳が十一、それから甚四郎男子、徳治郎、歳が十、甚四郎娘、みな、歳が五歳となっています。この部分ですね、つまり甚四郎から始まってみなにいたるまでのこの家族は、このメンバーは去年とまったく変わらな

図1



図2



く、ただ単に一歳歳をとっただけである、ということがこれは何も書いてありませんから、それがわかるわけです。

ところがここを見ますと、これですね、ふきあい果て申し候、となっております。つまり1773年に、ふきと言う名前の方がいたわけです。ところが1773年の間にこのふきは死亡したということが、ここに書いてあります。ふきは何歳で死亡したかは、今言ったようにその一年前のふきのところを見れば歳がわかりますから、その歳で死んだということがわかるわけです。それからこの家は子供が死にますけれども、また七五郎という子供が産まれている。甚四郎の男子七五郎ということが書いてある。これは去年出生仕り候と書いてあるわけです。皆さん不思議に思われるかもしれませんけれども、去年生まれた人間がなぜ二歳なのか、ということですね。今日の満年齢ではこれは0歳なんですけど、これについてはあとでお話します。

これから後は、この甚四郎という家が持っている、家が抱えている奉公人になります。奉公人ですから、宗派は違うこともあるし、あるいは浄土真宗レイ雲寺代々旦那です。甚四郎、下男、一年季、源十郎、三一歳とあります。これは源十郎という男が一年契約でもって、この甚四郎の家に奉公するというのをさしています。しかもこの源十郎というのは、去年採用されたわけで、どこから来たかということ、これは三枝郷中切村キ兵衛方より召し仕え申し候、三枝郷の中切村という村の源十郎を、この甚四郎の家は雇い入れたわけです。お寺をみますと、浄土真宗レイ雲寺ですから、さっきの真蓮寺と違います。それからその次が浄土真宗東等寺です。東等寺、甚四郎下男、甚左衛門でしょうか、そうですね、甚四郎下男、甚左衛門、歳が三七、これは灘郷冬頭村です。甚左衛門、灘郷冬頭村から雇い入れている、ということが書いてあります。その次が乙助、これはやっぱり甚四郎下男一年季、で旦那は還来寺というお寺、歳は二四です。これはこの寺を読むのにだいぶ苦労したんですけども、

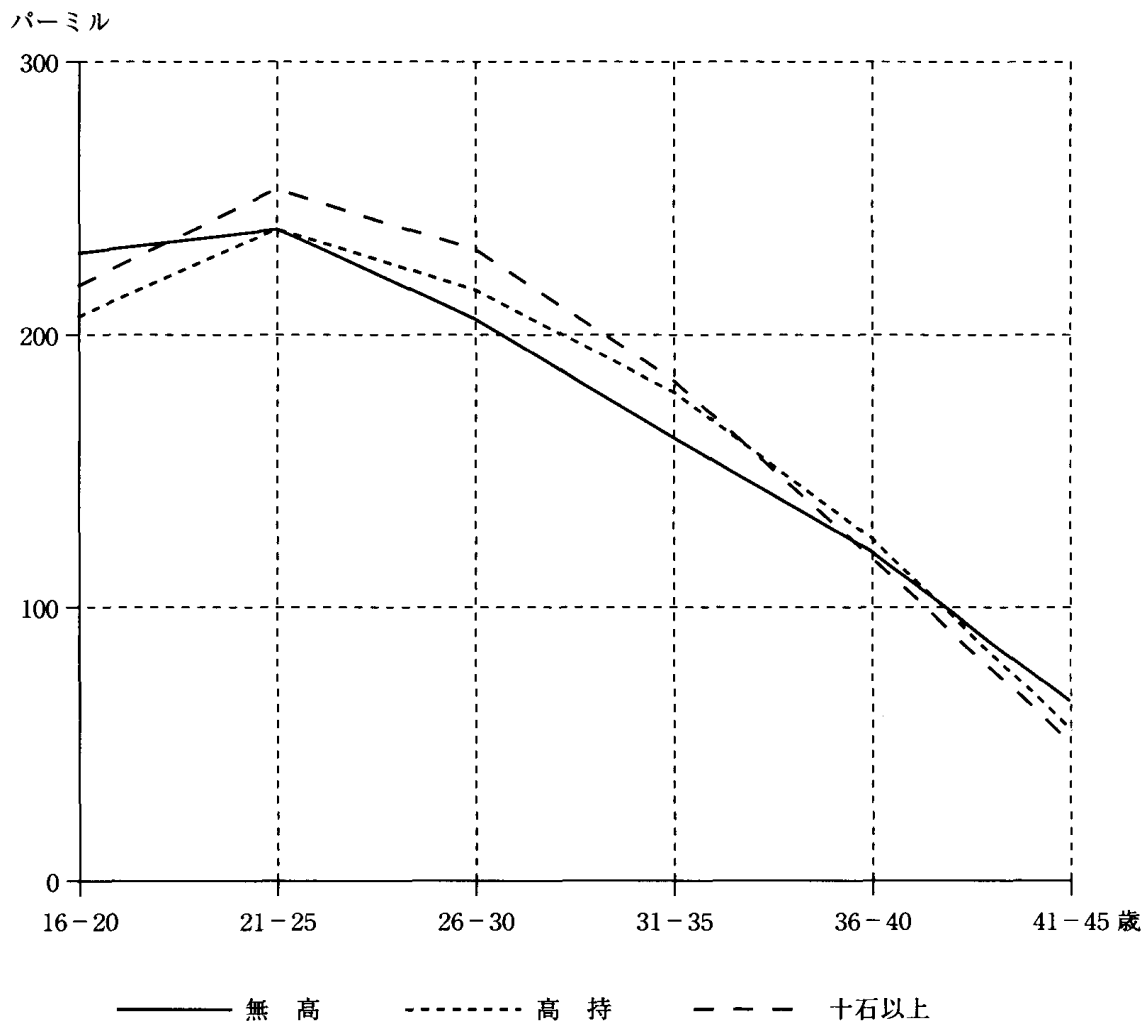
新田村長兵衛方より雇い入れ候とあります。その次が、甚四郎下男、これがやっぱり一年季、お寺は玄奥寺の旦那である。源右衛門という人が、二六歳で雇われた。これは小島屋長九郎という、つまり高山の他の与から雇い入れたということが書いてあるわけです。最後になりますけれども、長左衛門という男が浄土真宗の称讃寺というお寺の旦那でして、甚四郎下男でやっぱり一年季。この長左衛門という人がどこから来たかという、川上郷下林村武右衛門方より召し仕え申し候となっています。こうしてみるとこの飛騨の高山の宗門人別帳というのは、非常に情報量の多い人別帳だということがお分かりいただけたかと思います。これだけ情報量が多いと、さっき申し上げました、今日の人口学が扱うさまざまな要素というものを宗門人別帳で立派に果たすことができるわけです。

今日の講義に「貧乏人の子沢山というのは真説か」という副題をつけましたが、それについてお話ししようと思います。今でこそ聞かれませんが、江戸時代、明治時代には貧乏人というのは子沢山である、という一般的な信仰みたいなものがあつたわけです。ところが、この飛騨の高山で計算をしてみますと、どうも貧乏人よりも金持ちのほうが、たくさん子供を産むらしい、ということがわかったのです。marital fertilityという言葉があります。これは日本語では、結婚出産力、もしくは有配偶出産力という具合に訳されております。これはどういうものかといいますと、ある女性が何歳の時に子供を産んだのか、別の女性は何歳の時に子供を産んだのか、そういう子供を産んだ女性の年齢を集めてきて、一つの表にしたのがマリタル・ファーティリティです。この図は(図3参照)、16歳から45歳までの結婚してる女性を5年毎に切って作ったものです。たとえば、16歳から20歳の女性が何人かいて、この16歳から20歳の女性が何人子供を産む確率が、マリタル・ファーティリティです。だからたとえば、マリタル・ファーティリティ300/1,000と出れば、その年齢の女性が1,000人いれば、平均して300人の子供が生ま

れる。つまり悉皆調査ではなくて、標本抽出によってマリタル・フアーティリティを計算することによって、何人の子供がこの地域で産まれるだろうか、ということが予想できる非常に貴重な値です。

これを見て頂くと、おわかり頂けると思いますけれども、実線が無高、点線が高持、それから一点鎖線が10石以上となっています。無高というのは土地もなければ、家もない、つまり貧乏人の仲間入り、貧乏人です。江戸時代で土地を持つか持たないかは、社会的に決定的な地位を与えます。ところが飛騨の高山でも、土地を持たない、あるいは家を持たない人口が、約7割くらいおられます。残りの3割が、家を持っており、土地

図3 有配偶出生率，1773—1871年



を持っております。ですから無高というのは、無産階級で、一番貧乏な階層に属するわけです。それからたとえ一合であっても、土地を持っている人間は高持というカテゴリーに加えてあります。正確を期するために、10石以上の土地を持っている人間のマリタル・ファーティリティはどうか、というものを表わしたのがこのグラフです。

このグラフを見ますと、次のことがわかります。16歳から20歳の段階では、無高のほうが高持あるいは10石以上のものよりも、子供を産む出生率は高い。ただし16歳から20歳までの結婚している女性の数が非常に少ない。したがって無高、高持、10石以上の層の、この値の開き具合というのを、そんなに気にしないでいいわけです。女性が一番出産力が高いのが、自然出産力と呼ばれ、これは人為的なコントロールをしないで自然に放置しておけば、21歳から25歳で最もたくさん子供が産まれます。そうするとこの21歳から25歳のところでは、10石以上の高持が、群を抜いて高い。ただし無高と高持とは、ほぼ同等ぐらい。以下36歳から41歳までは、高持、もしくは10石以上の層が、無高の層を上回っているわけです。ということは21歳から40歳までの間は、貧乏人よりも金持ちのほうがたくさん子供を産む確率が高いわけです。

貧乏人の子沢山の語源は、私もよく知りませんが、貧乏人の子沢山というのは、この飛騨の高山の場合には当てはまらないだろう、ということが言えるわけです。つまり富裕な人のほうが、そうじゃない人よりもたくさん子供を産む。したがって貧乏人の子沢山というのは、どうも高山では当たらないのではないかと、ということがいえそうなのです。ただしそれでもまだ、気をつけなければいけないところがあります。と申しますのは、江戸時代は現在と年齢の数え方が違うわけです。今ですと満年齢で勘定しますが、江戸時代は数え年で計算します。だから理論的には2日間で2歳になってしまうわけです。つまりある年の12月31日に生まれた子供はその瞬間に、1歳になります。翌日は正月です

から、正月が来れば歳が1歳繰り上がるから2歳になるわけです。つまり真の年齢は0歳であるにもかかわらず、宗門人別帳に表われてくるときには、2歳で表われるということになるわけです。ただ、より正確に言えば、このグラフから言えることは数え年2歳まで、つまりある年の人別帳が作られてから翌年の人別帳が作られるまで生き延びた子供は、高持が貧乏人よりもたくさん産む、貧しい人よりも富裕な人のほうが子供をたくさん産む、ということが、この宗門人別帳を使ってわかったわけです。

さてこのように、宗門人別帳というのは、非常によくできた、いわゆるビューロクラシイの末端にあるという具合に考えることができるわけです。この高山では、村の代表は、村年寄り、年寄りと言われているようですが、その年寄りがいわば支配される側の、最も地位の高い役人です。この年寄りは、代官に直属するわけです。代官というのは、江戸幕府が派遣する、いわば地方自治体の任命による長ですね。任命制による長です。だれが任命するかというと江戸にいる、3,000石くらいの、勘定奉行が代官を任命いたします。勘定奉行は、中央省庁の大蔵大臣の役割を果たしているわけです。その間中央省庁では、老中、若年寄、寺社奉行、大目付といった幕府の要職にある人々が、月に何回か定期的に会合をして、政策を決定いたします。将軍は、ただそれを裁可するだけの役割しか果たしてない。つまり江戸時代の日本はすでに、今日でいうところの内閣に相当するものを持っていた、ということが言えそうです。したがってそういう内閣の組織があったからこそ、明治維新の時に、比較的スムーズに近代的な国家に移り変わることができた、ということが言えるかと思います。いずれにせよ庶民の段階でこれだけのデータを作る、毎年毎年作る、それを保管する、そしてそれが現在のわれわれの手によって、彼らが意図したこととは全く違う史料として使える。しかもこれは第一次史料であるということです。

時間が来ましたのでこの辺でおしまいにさせていただきます。